

四国旅行記

歴研では去る三月十八日より六日間に亘り、四国旅行が行われた。参加者は十二名であつたが、今年度は家令先生に参加を願ひ、旅行中もいろいろ御指導していただいた。次に示すものは、その旅行記の一端である。

x x x

沖一日目（十八日）

津——鶴橋——大阪——宇野——高松——屋島山上——栗林公園——琴平

沖二日目（十九日）

琴平——土佐山田——竜河洞——高知

沖三日目（二十日）

高知——室戸岬

沖四日目（二十一日）

室戸岬——甲ノ浦——牟岐——徳島

沖五日目（二十二日）

徳島——鳴門——福良——州本

沖六日目（二十三日）

州本——神戸——大阪（解散）

三月十八日

沖一日目（出発——高松まで）

三月十八日、我々旅行者十二名は、津発六時三十八分の電車で、四国路への旅へと足を向けた。幸いにして天気は良く、快適な旅ができるだろうと、皆語り合つていた。

我々は最初の乗換駅鶴橋であわてさせられるようなことが起つた。といつても結果的には大したことではなかつたのであるが、十二名のうち先生と石河さん、草野さんの三人がいはい。大旅行（城東線）の電車の時間は刻々せまるばかり、あちらこちらとさがしまわつた。しかしどこにも姿は見えない。とにかく大阪駅まで行つてみることにした。ところが、まだ我々の前に姿を見せない。今度は宇野行の準急鷺羽号の時間が、せまうて来た。

発車前五分位の時、草野さんと石河さんの二人があらわれた。どこに行つていたか聞いてみると、何と上本町からデクシーで来たというではないか。これには、我々は驚がされてしまつた。

。しかしよく向に合つたものだ。これで全員揃つたかと思つた。いや、まだ先生が見えは、今さらさがしまわつて、乗り遅れだらう、これから始まろうとする旅行は、おじやんだ。先生のことば車掌から連絡してもらうことにして、とに角我々は乗りこんだ。

車輛の前部から後部までさがしに行つた加藤さんに聞いてみると、ちゃんと後の方の車輛に皆揃つているというのだ。これぞ聞いて我々は安心した。実に冷や汗ものだつた。

こんなことがあつてから後は、快適な旅となつた。といつても、宇野行の汽車は満員だつた。しかし、思わぬ事件の解決に安心した気持ちがすつかり、我々の立つてゐる辛さを忘れさせてくれた。

十二時三十八分、瀬戸内海に面した岡山県宇野に着いた。降りてすぐ船に乗り移つたと言える位、汽車は港まで入つて来ている。いよく船の舷となつた。瀬戸内海の潮風を一ぱいうけで、四国の高松に向つて出発した。皆久し振りの船旅が楽しそつた。我々のいるところは、うす暗い二等船室だつた。しかし甲板に出てみると、小さな島々があちらこちらに見えた。約一時間の船の旅もたまち過ぎてしまい、香川県高松に到着、さうそく電に乗り、有名な源平の古戦場「屋島」へと足を運んだ。約十分向のケープルにのり、これまた有名な塩田地帯を見下した。何と美しい眺めなんだろう、ロケに「すばらしい」といふ声が飛んでいた。ケープルを降り、美しい景色をうに見ながら、我々の足下にも軽い、屋島寺を通り、海拔三百米という談古嶺へと向う、談古嶺という立札の下が、源平合戦

のあつたところだそうだ。昔の状態が、少しもつかゞわれないところなので、そう言わざるを得ない。

屋島を後にした我々は、次の見学地栗林公園へ、約四十分向という短かい時間内に制約されだまめ、大々木々の手入れの見事なことに感心するばかりだつた。実に美しい庭園だつた。栗林公園を出たのが五時半、疲れた足取りでカ一日目の休息地源平へ、着いた時はもはや六時半であつた。

この源平には、有名な金比羅神宮もあるが、それはさておき男性五名は、目を白黒させて酒屋をさがしまわつたのである。しかし今日は、よくさがしまわる日だ。やつとこのことで見つけたのが金陵を売る店。我々は手に手にビンを買ひ下けて、旅館へ持ち帰つたのである。とてう爽は、実に、学生々をうまく力モフレンジユしてくれる。学生服ではチョットネ!

その夜は、チビリくと調子の良いところ。実にうまかつた甘口の、何とも言えない味だつた。この金陵のおかげで、我々旅行客の中にいる一人の男(松村氏)を、一層楽しい旅行にしてくれたのである。その当人、前日まで熱があり、朝起きたらケロツとしている。これこそ神酒とも言つべきか!

こんなわけで、全員元氣にカ二日目の旅行へと出発したのである。

(担当 伊勢)

三月十九日

カ二日 (土佐山田―高知)

南四国と北四国を結ぶ唯一の国鉄路である土讃線は、なるば

と特異な景観をほこっている。特に大歩危、小歩危あたりは吉野川が土佐（高知）の北部で石鎚・剣而山脈の向に流れていたものが、阿波（徳島）国境に入つて急に北行して、石鎚山脈を横切るところにできた大渓谷で、数十Mから数百Mの絶壁を依つて、その絶壁を包む緑の樹木と、清水の深青色が様々な形をした岩石にぶつつかつてくだける純白色のしぶきに、一そう色の立体観を示してくれる。車中では盛んにカメラのシャッターの切れる音がする。そして合唱する歌声もさわやかに、一路土佐山田へと向う。

土佐山田駅についたのは十二時頃であつたろうか。外の景色に氣をとられていた私達は、急に空腹を感じて来た、駅前で夫々適当に昼食をとつた。こゝで食べた食事の内容は別として、夏みかんのうまいのにはびっくりした。さすがは南国の産物だと感じた。

それから約三十分バスにゆられて、竜河洞へとやつて来た。竜河洞は延川の丘陵にある鍾乳洞である。入口で親切に「ハッピ」を着ていつて下さい」と言われ、全員言葉に甘えたところ、十円の請求書がついていた。山口県の秋吉洞より小さいといわれるこの竜河洞の洞内は、無数の鍾乳石、石筍、石柱が、大自然を模型にしたような形を表わしたり、夢の国を表わしたりして、しかも様々な色の蛍光灯の照明にてうされて、別世界に入りこんだような感じだ。しかしこの洞窟は、単に別世界を想像させるだけのものではなく、弥生式遺跡が見られ、穴居生活の様子と如実に示す価値ある洞窟である。私達は、竜河洞スタイルと称するハッピを着ながら、甘い夢をみく、しばし当

時の人数について担当した。

土佐山田から高知についたのは、午後四時すぎだった。旅館へ行く途に瞬間があつたので、高知県立図書館へ行き、貴重な史料（検地帳）を見せてもらいに行くことになった。図書館へ行くと検地帳やその他の資料が、私達のために用意されており更にお茶菓子まで出して下さつてビックリ。なんとその人は中田先生の教え子という。先生からお手紙をいだきまして、……という吉松さんだった。私は、この人が親切にして下さる以上に中田先生のこの旅行に対する陰の御協力に感謝した。私達は、この検地帳にあらわれる面積単位、代々に注目しまた名請人の記述の仕方について肉心を持つた。二百余冊もある検地帳が、きちんと整理されている事はすばらしい。

私達は厚く御礼を言つて図書館を出たが、夕映に映る高知城の天守閣の美しい姿と、先程の人の物質には代えられぬ親切さに全く感激して、旅館へと向つた。

夜は、ハリマヤ橋附近を散歩し、ある若達はサンゴ商店へ、ある若達は酒屋へと向つた。旅館での夜は四回・二といわれる清酒。椿牡丹の試飲が始まつた。実に誰からも干渉されない旅館のかだすみで飲むのも、旅の疲れをほぐす。

（担当 中村）

三月二十日

才三日（高知―室戸岬）

(1) 高知

早朝より観光バスにゆられて高知見物。一番最初にくるところは高知城である。

高知城の空にそびえる姿は、いかにも近世、封建下にあつて農民達を圧していだ様子がかゞえる。ところでこの観光バスのガイドさんは、年頃十九・二十というところ、身長一六〇cmぐらい。やゝ美人で、声は非常によく、非常に感じのよい洒落をこぼすので、一見魅力的だつたが、……、よさこい節を唄いながら恋物語を語つていくのに、勝手な想像をして外をながめる。桂次についてみると、阪本龍馬や大町桂月等の銅像があり、天下をやり動かした龍馬の銅像を見ていると、その表情は遠い未来の社会をも見通す広い視野を表わしている。

桂次は、色とりどりの美しい石がおちていて海岸は美しい。

この辺ではこの石をひろつて、生活の料としている人も多く、とりわけこゝで拾わねばならぬ程の価値ある石ではないと思われるが、観光客の大部分がひろつている。われくも全く童心に帰つて、石拾いをした。

この桂次は四季を通じて美しいが、水平線からのぼる名月をみる秋はとくに名高く、大町桂月の名もこゝからとつたものであり、彼はこの地を非常に好んだという。

桂次を出て浦戸湾の東がわ、湾北にかゝる青柳橋をわたりきつたすぐそばの高台へと向う。こゝが五台山公園で、一ノ台から五ノ台までの小丘があり、五ノ台には四国三十一番礼所の古寺「竹林寺」がある。この寺は真言宗智山派に属している。だぶくの火災により本堂は室町時代の再建、仏像は藤原以後の秀作である。また宮殿の庭園も有名で、その部分のどこをとつ

てもまとまつているといわれるし、池のつくり方も非常に意味のあるものである。竹林寺の石段をおりたところに、植物学者牧野富太郎博士の記念館と植物園があつて珍らしい植物が育てられてゐる。このそばに茶店があつて、立食したオテンは実に美味だつた。

バスで五台山をおりる頃は、少し雨が降り出してきた。高知駅についたのは一時少し前ぐらいだつたが、次の室戸岬へ行くバスの停留所をあやまつて教えられた肩、当バス発車五分前にそれを知り、タクシーでかけつけた事等、すぎ去つてみれば滑稽なことである。

(担当 中村)

(2) 室戸 岬

高知を二時五十分に出発してバスで四時向余り、七時四分に岬についた。高知を出る時、一時やんでゐた雨も岬に近づくにつれ、風をともしなつたしけとなる。バスは終着まで行く人でいっぱい、十二人、立ちんぼであつた。車内はムツとする人いきれ。「車掌さん、バケツ」という声に身を傾ける。これくらい長い乗車になると、酔つて胸を悪くする人があるらしい。私達は車中のやりきれない気分から抜け出ようと、誰かうともなく合唱する。

岬についた頃はまつくらな中を、バスのライトに浮き出されだ雨が、白い煙をあけて私達にふきつける。車中の人いきれで暖かかつた中から降りた私達は、そのつめださに首を縮める。今晚の宿は室戸ホテルである。広いロビーを想像する私達は少々がっかりしたようなおそまつなものである。しかし、東南

端にあるということ、このひびいしけの日に岬についたといふことが、私が、室戸岬という地名にもついていたイメージと寸分、違わないものにしたのであった。

私達は、ザードドドドという液のくだける音と、松をゆさぶる風を聞きながら、小さく一つにたまり、夕餉の膳を囲む。きゆうりのつけものの青さが目にしみるようだ。それにもまして、少し虚っぽい感じが、私に母の手製のつけものを思い出させたのであった。

六畳に女性五人が入つたのであるが、部屋が小さかつた事とこのようにひびいしけに岬に来たといふことが、私達の心を一にせよにはおがなかつた。二時半すぎまで話をはすむ。あゝ、旅に出て来てよかつたなと思ふ夜であつた。

翌朝はまだ風が強く、小雨だつたので、測候所と燈台を見学できなかったのは残念であつた。でも、心配していた風雨もやみ、出発頃には曇り日の光りさえみえてきた。

雨に洗われた丈の高い黒々とした岩、々々、それに打ちつける白い波、あとに大きな波が来る。それが一番高い岩にぶつかり、くだける。はんだかあの波といつしよに自分も、こぼれはなりたいという気がしてくる。豪壮という感じが、ピツタリである。自分の表現力の貧しさから、その様子さうまく表わすことのできないのが残念であるが、芭蕉も松島を見て感嘆の声しかあはれることができなかったから、私もかんべんしていただく。

申浦へ向うバスで出発する頃には、すっかり晴れて暖かい良い天気となる。朝の少し黄色味を帯びた海の色も、太陽が登る

につれ青さをまし、るいゝとした岩と、それからまわりの山々が美しい調和を見せる。あゝ、カラーフィルムを待つてくるべきだつたと思ふ。

私には、このオニ日の室戸岬での夜が、一番旅に出て来たという感じを強く与えた。そして、しけの岬と晴れた岬の海を比較し、鑑賞することができた私達は幸いであつた。

(担当 大井明子)

三月二十一日

オニ日 (室戸岬—徳島)

昨夜の雨は、すっかり海の通りをかつてしまつたのか、朝、目の前に開けた海の姿は、その恐りのあとをそのまゝに、白い波が目の中におどろこんで来たかのように、私の視界は、その白く恐つた歯をむき出して勢よく岩にしがみついている海の姿で満たされた。それが室戸岬の、真の姿かも知れなかつた。あちこちから岬が海の声にかこまれ、眼を通つてはとばしり出てくる感激さうしようもなく、この波にくだかれて玉と散りたいて、散つてしまわずにおれない自分を感じた。乾燥した町の生活の中に忘れていた、そして眠つていたものを、海の声は呼びさましてくれた。この室戸岬の感激は、前の人担当してくれらるでありましょう。私の分担当である室戸—甲の浦—牟岐—徳島の行程を追つてみよう。

室戸岬でゆつくりとして、目だけでなく体全体で景勝を味わい、この景色の中に入りこんで、一輪の巻におさまつた私たち

はそこから脱け出し、徳島バスにのつて、景観に奪む海岸線を右にみて、エフボ街道に沿つて走つた。バスの窓枠によつてその景観は四角い画面に切りとられ、何枚もの絵をいろんな観点から示してくれた(上下左右に)。

勢よく追つて来た荒狂う波は、まっ黒な岩にぶつかつてまっ白なしびきと姿をかえ、その足もとに唐草模様を描いては引返していく。岩のしびきと海水のしびきが、黒のしびきと白のしびきが同時にぶつかり合つて、はびしい音でくずれおれながらその隙に長い彎曲を描き、海岸線は白と黒の融合の中につくられていく。ゴックとした荒いきめの肌を見せた岩は、勢いよく白い波にその肌をおかされていくのだ。けれどもこの波の気まぐれにうちよせるのに対し、岩の表情は種々の様相を示してこれぞうけ、その寛容さと落つきを感じさせた。いかにこの岩と波が調和して、自分達の営みをつづけている事か。それが同じ営みだとは思えない。人間の毎日の生活でも同じ事を営んでいても、そこに変化を見ることのできるのと同じではなからうか。

海は女性的だという。それを自他共に許して来たのであるがしかし今こゝでは、この言葉は通用しない。気まぐれな波がうちつきたりかみついたり、すねたりする潮をガツチリとうけとめこれ以上あばれぬようにゴックとした手でなだめている岩。男性的な海の豪快さと、岩の母性的な寛容さの中に、その言葉と否定せざるを得なくなつたのである。つまり違つた海の顔を見ることができたのである。そんな面をいろいろ右に見せながらバスは海岸線を走る。

海の色は曇天のもとに、にぎつた色をし、ターフトーンにつままれていた。水平線まで失つて空との境は見せていなかった。ただがたて空まで荒しにいつた海水が、空からかけおりて来たという感じが強かつた。しかし、窓にきりとられる絵が多くなり、次々と変るに従つて、海の色はだん／＼と私の頭の中にある本来の色とともどしてきた。即ち、紫色の水平線の下に青緑色がおび状に広がり、液の中にはシャーベントな線と白のたわむれが見られるようになった。そして灰色の砂に、白いくつきりと描かれた海岸線もなだらかなものに変わつていつた。又岩の形も面白く、夫婦岩、毘佐古岩、竜宮岩、目洗岩、月見岩というようなるもつけられた岩もあるそうだ。自然の美は人間の心までその中に昇華し、自然の美は人の心の美までよびさますものゝようだ。

ニキロメートルもつづいたすばらしい海の絵巻は閉じられ、山道を兜行していつた。牟岐から国鉄ローカル線で徳島につく。この徳島で私達一行は、すばらしい奇遇に会つた。一せいに喜こびの歓声が上つた。就貳面授のため同行できなくなつた萩野さんの姿がそこにあったからだ。彼女は、はるばる一人で私達一行に追いついたのだつた。何事ぶりかで昔の知己にひよつこりとめぐり合つたような感じを覚えた。意外な再会はそれだけに皆を感激させ、そのよろこびが喫茶パラーでの乾杯となり白鷺館でのパーティと予定が変更された。

眉山のロープウェイは、十五分おくれた／＼め登ることが出来ず、二十二日に持ちこされた。夜景観照も予定表の上での期待だけで終つてしまつた。

徳島は、四国三郎といわれる吉野川が紀伊水道にそそぐ三州にひらけた東四国の中心都市で、旧藩時代日本一を誇つた阿波蜂須賀藩の水軍の本拠であるだけに、島と州で形づくられた水の都であるという。近代的な明るい町で、駅前の広い道路がまっすぐのびている。道のまん中にヤシの木のある緑地帯も作られ、町に趣をそえている。歩道のアーケードには、はやばやと桜の造花がならんでかざられ、春の町、花の町にいろどられていた。その日はお彼岸であつたけれど、まだく寒さも彼岸までといえそつになく、かざられた桜の花びらまでふるわせている寒い日は、私たちの肌にもしみこみ、冬からぬけきれないでいる季節の変り目を感じざるを得なかつた。町のすぐ後に、眉のような線をもつ眉山が迫り、唄るい繁華街は近代的な発展のあとがみえるように思われた。

八時頃からパーティを飛いた。司牡丹という四国の名酒により乾杯をし、桜色に頬をそめた小虎になつた。そして杯が進むにつれ、それぐのかくれだる才能・興の手が出て来た。日本一のギターの名手へ禁じられた遊びが最高)、ものまねの名手(先祖はうぐいすだつたらしい)、淡い民謡を盲腸からしほり出す人、ソプラノに弱い歌劇の歌手など、それぐの喉自慢はすばらしい。このすばらしい旅を、況うにふさわしい愉快なパーティで二十一日は幕が降りた。(担当 木村セイ子)

三月二十二日

才五日 (鳴門―福良)

三月二十二日、四国路も愈々大詰を迎え、最期の期待を鳴門

の渦潮にかけた。元来期待というものは、かけすぎない方がよいらしい。干潮の時向と出帆時向がずれて、結果は「残念」の一言に尽きた。

それを多少とも救つてくれたのが、鳴門公園に向うバスの中から眺めた鳴門海峡の景、殊に紺青をなす水の色は素晴らしい。鳴門大橋の少し円弧を描いた赤、空の青と海の青、そして松の緑が見事なコントラストをなしていた。将に一大パノラマを見る思いだつた。

我々の失望と諦めを棄せて、汽船「あわじ丸」は一路福良へ。本格的な渦潮は、そんな事情で見られなかつたが、その微候は随所に見られた。そこにおいて、我、鳴門にきた甲斐を見出す。苦しい故、苦しい故である。波は穏やか、然し内海に達むにつれて波頭も大きく、荒くなり、ちよつぴりすまじさを増すが、湾に入ると、再び静寂さを取り戻す。水の色は深緑、もつとも、神秘的というほどのものではなかつたが、

展望台から眺めた淡路島は、とんでもない見当違いだつた。そんなちよつぱけなものではなく、船上からとらえたそれは、ちよつと、姓を五・六匹飲みこんだ蛇が、うねつているようであつた。山並は、柔らかな円弧に囲まれて、やさしい文体を感じさせる。山肌は虎刈りで、頗る愛敬あり、これもよし、あれも又良しで、とうとう福良についでしまつた。

い、遅れたが、船の進行方向に向つて左の光景は、ちよつとしたものだつた。温暖は右の寒に對して暖、おかしも陽の光が雲間から洩れて、波向に反射し、キラ、キラ、キラと光る。そのはるか彼方に、墨絵のごとき黒い山が、ボーと霞んで、

ついで、うとくと、まどろみだくなるような、そんな感じだった。淡路島上陸。

(担当 石河朝子)

(2) 淡路島

晴れた海の色が緑色に変わって、午後四時五十分、淡路島の南岸、福良港についた。ここから淡路交通にて洲本に向かう。

島といつても、本州とはほとんど変りない眺めだ。古風なガツシリした瓦屋根の家も多く、又新しい家も、学校や寺院も重窓から見え、比較的裕福そうな村々のだ、すまいだった。平坦につづく田畑に、麦と一緒に目立つて多いのは、たまねぎの栽培らしい。平野をこえてゆるやかな稜線の山脈が見られた。小高い丘の林も自然のまま、覆つていゝ。いかにもおだやかな感じが淡路の印象だった。畑中の道に、黙々とした表服の葬列が見えて、旅の心に異様な感じをうけた。

私達が興味を引かれたのは、駅毎に白紙をばって短歌や俳句が書きつけてあることだった。島で平穩に暮らす人達の心根を思わせて風情がある。大井さんと秋野さんが声を出してよんでくれるのを、二・三書きとめてみた。

〇水くむと舟をよせたる秋風の淡路は書も打つ粘かな

平井晩村 (「かもり」の駅にて)

〇桜鯛島の眺か人を呼ぶ 箱文(ひうた)駅にて

どのような意図で書かれたものだろう。どんな人達が詠んだのか。そういうえば、駅名が皆ひらがなだけで書かれているのも珍らしい。

州本での夜は楽しかった。夜の街にあまり興味もなく、最後

の晩だったもので、皆ひと部屋に集まることにした。先生にも参加していたが、童心にかえつて愉快なゲームをやつたが、まじめな顔で始めたものの失敗つぎで爆笑がわき、時間を忘れる程だった。

二十三日、朝、近くの三熊山に登った。州本の町には、土産物店と大きな旅館の建物が多い、海に面した町で、浜の松林を通して、朝の光に白く映える海が見える。観望所つた人が、馬で山に登らないかと誘いに来る。海辺の町に馬なんて、びっくりしない。

山は散歩にちようどよいほどの道だった。温暖なせいだろうか。ほとんど冬枯れの名残がみられない。笹の縁が白くなつてゐる程度だ。樹々には新芽が伸び出し、冬をこして来た緑に若々しい浅緑が映えて美しい。本物の鶯と、中村さんの物質似の鶯が呼が合つて、さわやかな朝の山だった。

この三熊山には、脈がある。成といつても石垣を築いたついで、未完成に終つたものらしい。山上に天守櫓があるが、これは観光用のものだという。上つてみたら、何もなくて壁一杯落書きしてあつた。だが、山上からの眺望はよかった。州本の町には、城下町の名残が見られる。あまり広くはないが、割合まともだった立派な町のように思われた。ここは阿波の降参賀藩に属していたそうだが、歴史のことは解らないので、記憶に残すことが出来なかった。海がずっと入江になつてゐるようだ。山頂から見降す海は、緑がかって、波もなく、全く静かに風ぎ渡つてゐた。遠くに見える山は淡路富士だと誰かが教えてくれた。いつまでもあきない美しい眺めだ。

旅館に戻り、州本の港を出帆したのは、十一時三十分頃だつたろうか。淡路のお土産にみかん漬があり、箱に「浮橋」と書いてあつた。神話にある国つくり、男神と女神がその上に立つたという天浮橋に關係があるのだろうかと思ひながら、眺めている淡路島は、もう空想の世界に入りかけていた。

(担当 草野慎子)

帰 途

その後、神戸についたのは三時すぎであつた。

神戸の町には、橋の下を利用してバラック街が建つてゐるが、軒並にテレビのアンテナが立つてゐるのには、何かしら時代のズレを感じられた。

全員そろつて大阪まで来て、食事をとつて、自由解散になつた。

今年の旅行は、すべて旅館で宿泊したことが、身体によく、誰も発病せずに帰れたことは感じがよかった。

最後にこの旅行を終えるに當つて、旅行中いろいろ御指導をいただいた家令先生、助言下さつた中田先生、親切に史料を見せて下さつた中田先生の教え子の吉松さんと、旅行計画委員諸君に深く感謝する次第である。